

語り継ぐ、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



“息をはずませ、
頬を赤くそめ”

この冬、六十回目を迎える「さっぽろ雪まつり」。開催のヒントとなつたのは、札幌一中(現札幌南高)の雪台戦ともう一つ、小樽市の北手宮小学校の雪まつりでした。北手宮小のまつりは昭和十年(一九三三)に始まり、「雪まつり発祥の地」として現在も続いています。その地碑には「雪国の人づくり 雪ふる中を 息白くはづませ頬赤くそめ 子等の雪まつらうすがたに ただたのもしくいちらしく思う」という提案者の第二代校長の詩が刻まれています。生徒と先生が一月近くかけて雪像を作ったそうですが、なんともほほえましい光景が目につかびます。

ひと街ごと No.26

- ・時の街角／旧浦河公会堂 2
- ・マチの博物館／かけ箸 3
- ・あるばむレトロポリス／さっぽろ雪まつり 4
- ・川筋を行く／石狩川 5
- ・来た道行く道／KEN工房 6
- ・道具で道草30年 7
- ・時計のある風景 8

二〇〇九年 冬(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

様々なかたちがあった開拓入植
慣れない気候に耐え抜かなければならない日々
どんな想いを見つけていったのでしょうか
それが宗教的な信念に基づくものなら
まず必要だったのは教会――

クリスチャンの開拓入植 日曜ごとの安息日集会

旧浦河公会会堂

明治二十七年（一八九四）建築

明治初期、北海道開拓に本州から
やってきた東北十族や屯田兵のこと
はよく知られていますが、民間人の
会社組織による開拓入植もまた大き
な足跡を残しています。

同社副社長の加藤清徳が兵庫・広島
両県から五十余人を引き連れ、第一
回の移民として浦河西舎村に入植。
続いて翌十五年には第二回移民、男
女八十余人が元浦河地区に入植しま

有名なのは帯広の晩成社や、函館
湯の川など七カ所に入植した開進
社。今回紹介する浦河公会会堂を建
てたクリスチャンの団

体「赤心社」は、日高
地方に入植しています。
明治十三年（一八八
〇）、神戸の実業家、鈴
木清という人が北海道
の資源に着目し、キリ
スト教結社「赤心社」
を結成しました。翌年、



した。
入植者たちは開拓のかたわら、指
導者・沢茂吉のもとに寺子屋での教
育を行ったり、日曜講話に集まった
りして、同十七年には私立赤心学校
を兼ねた会堂を建設。六日間は子供
たちの学校、日曜日は安息日集会所
としたのです。

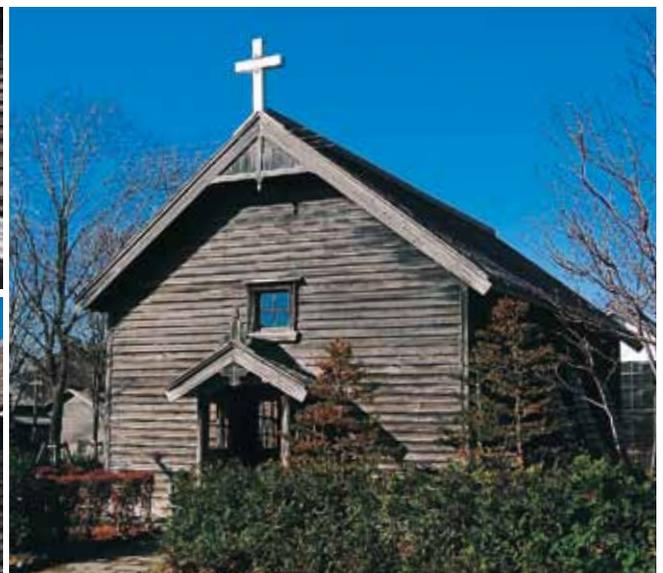
その後明治二十七年（一八九四）
に、現在のJR荻伏駅近くに二代目
の会堂を新築。大正七年（一九一八）

には一週間かけて現・元浦河教会の
場所に、曳き家方式で移転していま
す。開拓の村にあるのは、昭和五十
八年まで使われたこの会堂を創建当
時の姿に復元したものです。外観の
いかにもシンプルな印象とは異なっ
て、建物に秘められた歴史を手繰る
のも興味深いものがあります。
建物の構造は、切妻造り妻入り形
式の一部二階建て。中に入ると礼拝
堂がすぐ目の前です。中央の講壇に
向かって長い二列に並べてあり、
床や壁、天井はすべて木造。船底型
の高い天井に牧師の声が厳かに響き



そうです。
当時の様子を再現したオルガンや
大型の薪ストーブ、ランプも、祈り
の場所にふさわしく簡素。慣れない
開拓生活の合い間に、牧師の講話に
耳を傾ける人々のつましい姿も浮
かんできます。

桁ぶき屋根に下見板張り
破風の頂の十字架がなければ
普通の民家とあまり変わらない



正面の講壇に向かって二列に木製の長いすが並ぶ
慣れない気候と開拓作業の合い間の休息が目に浮かぶ
※参考文献「北海道開拓の村 開村10周年記念誌」

これまでで最も小さくて、いちばん新しい博物館
そもそも広いスペースなど必要のない商品だけれど
一度にこんなたくさんの種類にお目にかかれるなんて
「マイ箸」の存在感が増すこと間違いなし

「マイ箸」の存在感、 自分で選んでこそ。

まずはこちらの所在地に注目を。「チキで二階」とは何のことか、です。じつはこれ「チキユー」のためにできることとの略。一階の創意を凝らしたヘルシーな食事のできるレストランの名前が「チキで」。両店を運営するのは、地球環境のためによいことをと、二〇〇一年に「マイ箸」運動を立ち上げたグループです。だから「かけ箸」とは、人と地球の架け橋でもあるわけです。

しかしそんな環境運動は別にしても、こちらの約三百種類の箸の陳列を目の当たりにすると、まず痛感させられます。我が家の箸は、誰がいつどこで買ってきたのかも覚えていない。それではあまりにも箸に、作った人に失礼ではないかと。にごやかに応対してくれる店長の室稔子さんは、ここを立ち上げた女性メンバ

着物地で作った箸袋とおしゃれな組み合わせ、箸使いまで気配りを



「一人のお母さん。ほんの手伝いのつもりが、箸のベテランになったようです。室店長によりまして、入って右手の壁に展示してあるのが道産のオリジナル。左手二方のものが主として小浜市から取り寄せているものだそうです。小浜市は日本の塗箸の八〇割以上を生産。先ごろのアメリカ大統領選挙で、市を挙げてオバマ氏にエールを送ったことでも知られています。

箸の素材は堅い木が適しているということで、道産材はオンコ、エリマキ（ツリバナ）、セン、アオダモ、シラカバなど。工芸家・柏葉勝徳さんの木の質感を生かした素朴な作品に、北海道らしい味わいがあります。一方、道外ものの材料は紫タンや黒タン、栗などで、うるし塗りや象がんに施したもののなごささま。二千円から四千元のものがよく売れ



「箸マイスター」室稔子店長



道内外の約300種、埋もれ木で作ったものも

子供たちが喜びそうなキャンディー箸や色鉛筆箸、実用的な携帯用やめん類専用箸。かと思えば、埋もれ木で作った口マンあふれる箸、一万二千円もする古代わかさ塗り―思ってもみなかった箸の小宇宙に触れてみてください。



一般にも定着しつつある携帯箸のほか、さまざまな箸のアイテムが300種選ぶひとときが楽しい



昭和36年(1961)第12回
大通2丁目の大雪像「西遊記」



あるばお レトロポリス

さっぽろ雪まつり

六十回記念という今年の「さっぽろ雪まつり」マンネリとか商業主義とかいわれながらもこの回数は立派です。でも思い出に残っている年ってあります。人間でいえば還暦。ちよっと幼いころを振り返ってみては――

見せたいマイタウンの冬の姿 還暦を契機に原点へかえろう

さっぽろ雪まつりが始まったのは昭和二十五年(一九五〇)。戦争が終わって五年しかたっていませんでした。物不足などで街のムードにもまだまだ暗さが漂っていました。そんな気分を一掃しようというアイデアが雪まつり。戦前に行われていた小中学生の、いくつかの雪遊びがヒントになりました。

以後、エポックメイキングな出来事を拾っていきますと、雪像の大型化、自衛隊の制作参加、実行委員会の組織化、マスコミによるPR、本州や世界からの観光客増、真駒内に第二会場、さっぽろオリンピック開催、雪の女王選出、すすきの会場、市民雪像などと続きます。

大通西七丁目会場に
お目見えしたのは、中学生と高校生の手に
よって作られた七点。
写真の「ミロのヴィナス像」はそのうちのひとつです。当時の札幌市の人口は三十一万四千人。花火大会なども行われ、二日間で五万人の観客が集まったそうです。

ここへ、はてと気の付くのは、何かはまつり見物に行っている、とくにあの年と記憶に残っているプログラムはあったらどうかということです。長い氷の滑り台を何時間も待つてようやく番がきたなどという思い出だけでは、世界のさっぽろ雪まつりが泣くかも。
冬のまつりは、夏以上に参加してこそ意義のあるものです。大通やさくらんどもよいけれど、YOSAKOIのように地域の核となっているところでサブイベントをやってはど

うでしょう。観光客も呼び込んで、冬を楽しんでいる姿をもっと見てもらいたいところ。
東北地方のとある温泉町では、住民それぞれが家の前に、オリジナルの雪だるまを作って道行く人の目を楽しませているとか。百九十万人都市といえども同様です。市民主体のまつりへと趣向を凝らして――はたして街が大きくなりすぎたかな。



最近の大通会場の大雪像から
雪像作りの技術やテーマにも時の流れが



上は昭和33年(1958)第9回
大通西4丁目の大雪像「白雪城」
下は昭和25年(1950)第1回ポスターと
大通西7丁目の雪像「ミロのヴィナス」

※上四点の写真提供/札幌市写真ライブラリー

石狩川七

洪水の歴史

曲がりくねった大河ゆえの 「望海のごとく」を防ぐ

石狩川の名はアイヌ語の「イ・シカラ・ペツ」、
「非常に曲がりくねった川」に由来しています
ひとたび大雨が降ると低湿地帯にあふれる水
田畑や民家に大きな被害が及び、
その歴史は一面では洪水との闘いでもありました

度洪水に襲われる
ものであり、一
やすぐさま氾濫し、一

「石狩川の改修は明治
四十三年に着工されたとはいえ、
昭和の初めまでは全く手がかけら
れていない、いわゆる原始河川ぞ
会、昭和五五」の第一章・洪水の

川筋を行く

人と川の
様々な
かかわりを
たずねて

歴史の
書き出し部
です。

その「望海」に
も三つの形態があつて、
一つは一般的な夏洪水で
す。大量の降雨による増水、
堤防の決壊などで水があふれる
こと。二つ目は、積雪地特有の春
先の融雪洪水。そして三つ目は逆
水による洪水です。河川堤防の整
備が進んだ結果、本流の水位が上



大正6年、石狩川最初の切替工事
生振新水路を記念する碑

がつて支流の水が本流に流れ込め
ず、さらには本流の水が支流に逆
流して起こる洪水です。

明治以来、夏洪水や融雪洪水に
どのように対処してきたのかとい
いますと、当初は蛇行した川の流
れはそのままにして決壊した場所
だけ直し、増水時はパイパスで流
すという方法でしたが、昭和に入
つてからは捷水路方式といって、
蛇行部分を直線つなぐ方法に変
わりました。昭和二年から二十一
年までの間に、この方式によつて
石狩川の河口から江別までは約半

分に、江別から月形までは約三分
の一も流れが短くなっています。

この捷水路方式の代表的なもの
が、現在の石狩河口橋近く、石
狩市美登位―生振間の直線水路。
かつては石狩川本流の蛇行部分
だった現在の茨戸川は、いわば
出口のない内陸河川になってお
り、増水時だけ水門が開けられて
本流とつながります。大正六年
(一九一七)着工以来、完成まで
十四年にも及ぶ大工事でした。

こうして幾度にもわたる治水工
事で、戦後の水害は大幅に減りま
すが、それでも昭和三十六年七月
二万三千三百戸(被害家屋。以下
同)三十七年八月四万二千二百戸、
五十年八月二万六千六百戸、五十六年
八月上旬二万二千五百戸、同八月
下旬一万二千二百戸、六十三年二
千戸といった被害が出ています。

中でも昭和五十六年八月上旬の
洪水では、札幌市内の住宅も五千
戸が被害を受けています。それら
は石狩川の支流である豊平川、創

成川、発寒川といった川の下流域
に集中しました。

札幌市では近年、大きな水害は
ありません。しかしここまで都市
が膨張すると災害の恐ろしさは計
り知れませんが、地下街や地下鉄
などの浸水にも注意が必要です。
石狩川という北海道の母なる川の

恩恵を受ける一方で、
洪水・治水の経験を
今後にわたって生か
していかなければな
りません。



生振新水路の開削によつて
内陸に残った現在の茨戸川



茨戸川が増水したときに
開けられる水門
石狩川河口橋近くにある



札幌市内五千戸を含む
一万戸以上の家屋の浸水を報じる
北海道新聞(昭和五十六年八月五日)

来た道、 行く道。

様々な先輩がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

いすの製作ではなく、なぜ修理・張替えなのか——札幌市手稲区新発寒にある黒田健司さん(五七)の仕事場「KEN工房」を訪ねたのは、そんな単純な疑問から。その長いキャリアと技術の話聞きながら、まさに時代にマッチした仕事であることと感心しました。

黒田さんが自分の工房を構えたのは十四年前。それ以前に二十年以上の大手家具メーカー勤めがあり、さらにその前にはいす作りの修業時代がありました。独立の転機は、メーカーの作る家具が飛ぶように売れたバブルの絶頂期です。黒田さんには、こんな時代が続くはずがない。いつか修理が必要になる時が来る、という予感がありました。

私たちは「家具」とひとくくりにして

黒田さんの手で生まれ変わるいす。写真は長いすに新しいレザーを合わせている



“新品以上”になった
約80年前の日本製

食店などの業務用を手がける人は多くても、家庭ものできる人は極めて少ないそうです。ここに黒田さんの先見の明がありました。いすに限らず、家庭にあるものは捨てずに修理して使う時代が、ようやく黒田さんに追いついたのです。

黒田さんのいすに対する哲学。「修理と



KEN工房 (椅子修理・張替)
札幌市手稲区新発寒7条11丁目11-20
TEL (011) 683-5143
URL <http://ken-koubou.net>

いつでも、壊れたところを直すのが修理ではありません。いすは家族の一員のようなもの。座り心地が元通り以上でなくては。ここに誰でもできるものではない黒田さんの腕の秘密があります。

その作業工程を簡単に言いますと、お客から預かったいすは、まず生地をはがしてクッション部を取り去り、骨組みだけにします。クッションはウレタンのものであれば、古い



いかにも工房という雰囲気の仕事場。修理の全工程を一人こなす

思い出一杯のいすは 家族と同じだから 「元通り以上」に修理

黒田健司さん——札幌市・KEN工房



ものならわらがつまっていることも。これを復元するのですが、難しいのがバネの加減やクッション部のふくらみの調節、それに合わせたレザーや布の型取り。一人で全部の作業をこなすには、センスと器用さが問われます。

「お客さんは、使ってほろぼろになっていても思い出が一杯詰まっているから、少しくらいお金がかかっても修理したい」(黒田さん)。肌に触れるものだけに、想

像していたものより出来がよいときのお客の喜びがやりの一つです。

メーカーに勤めていた時には東南アジアに技術指導に行ったり、国内の生産地をあちこち視察したりしている経験から、「いすを見ただけで作られた国や皮の産地までわかります」(黒田さん)。時には年代、価格まで言い

当ててお客をびっくりさせることも。日本でも初期に作られたようないすや、ヨーロッパ製の高価なものを持つてくる人がいるように、どちらかといえば年配のお客が多く、財界人や大学教授などの注文もこなしています。でも、黒田さんが大事にしているのはお客とのフィードバック。よそには頼みにくい家庭ものの依頼があったら、気軽に修理してあげてい

ること。最近孫のためにと作った丸いすが一般の人にも人気で、注文があれば応じていると目を細めています。

筆者にもあった映画漬けの日々。中でも高いお金を払ってそのビデオまで手に入れたほど心に残った作品がある。いまは安価なDVDで見られるが、当時の感動は得られない。

ミラン・クンデラという人が一冊の本を書いた。

『The unbearable lightness of being』

そしてそれが、「存在の耐えられない軽さ」という邦題で映画化された。

一九六八年のつかの間のプラハの春、ドブチュック第一書記によるチエコの人間の顔ををした社会主義、それが当時のソ連を中心とした東欧六カ国の戦車によって圧殺されていく過程を背景に、脳外科医のトマッシュと妻のテレザ、画家のサビーナの三人の運命を描いた映画だった。アメリカに亡命したレナ・オリン演ずる画家のもとに、トマッシュ夫妻が死亡したという手紙が来て、この映画は終わりになるわけだけれど、見終わったあと、私は深い感動につつまれた。最後のスタッフの文字がスクリーンに映し出され、どうせひろい読みしかならないので、つまらない映画だとその時点で席を立つのが常なのだが、このときは席に座ったままであった。私だけではなく全員がそうであった。

こんなことは、「サンチャゴに雨が降る」以来である。もっとも、そ

「存在の耐えられない軽さ」ポスター、帽子、下着。

の時はライトがついて明るくなっても誰も席を立たず、客席から拍手が起きた。もちろん私もそうした。そして、可能なかぎり各地の映画館に足を運んで繰り返し見た。それ以来である。

映画が最終回でなかったら、もう一度見たと思うけれど（当時は通し上映があたりまえ、あいにく私が見た回は最終回だった）。

次の日、チケット売り場に寄ってみると、まだ前売りのチケットが残っており、しかもそれには背広姿のトマッシュ役のダニエル・ディ・ルイスと、黒の下着姿でおじいさんのかたみの帽子をかぶったレナ・オリンのがのっていた。ラッキーだった。（当時は映画が封切りになっても前売りチケットを売っていた売り場があった）

そしてまた同じ映画館に足を運んだ。もぎりのお姉さんにチケットの

写真の部分にキズをつけないように頼んでいてねいに切ってもらった。パンフレットを求めると、先ほどのお姉さんが、ポスターもどうかと言う。飾るには大きすぎると思ったが、それも買うことにした。

前回と同じような感動を味わい、



「存在の耐えられない軽さ」のポスターと「サビーナの帽子」（どちらもレトロスペース所蔵）



少したつてからだと思うが、これのビデオがあるという話を聞いたつてを頼って聞いてもらおうと上下二本組でたしかに売っているという。しかし問題はその価格で、気安く買える値段ではなかった。

私もしばらく考え込んだ。そして思った。たしかに何年か過ぎればビデオの値段も下がり、ひよっとしたら軽い気持ちで買える日が来るかもしれない。しかしその時、私も年を更に重ねており、今のよう

な感動を画面より得られるであろうか？

映画館に足を運ぶのは、まさにこのためであり、今ならまだ間に合う、共感も感動もできる。そう思い購入を決めた。買

いに行ってくれた友によれば、ビデオ屋のおやじさんは友の顔を上げしげと見つめ「本当に買うんですか？」と何度も念を押したという。

そのビデオを見るため、当時一番高いデッキを買った。自由のために闘い、傷つき、地に倒れていった多くの人々に思いをさせると、心の底から、熱いものがこみあげて来た。高くない、決して高くないんだ、そう思いながら何度もビデオの画面をみつめていた。

やがて時が流れ、画質が良いというレーザーディスクが現れ（九千三百円）、ビデオも一本組になり（千九百八十円）DVDが九百八十円で売られるようになった。その全てを手に入れたけど、見てはいない。見たとしても、そこからはや、あの時に私の心をゆさぶったあの感動は生まれなことを知っているから。人間の顔ををした資本主義がないように、人間の顔ををした社会主義は人間の心の中にしかなかったことを知ってしまったから。

でもあの日々は懐かしい。今、レトロスペースにある黒い帽子をながめるたびに、そう思う。

●編集部注 サビーナの帽子は、どうしても似たものが欲しくて、たまたま古物店で外国製を見つけたそうです。「下着だけはさすがに買いに行けなかった」（筆者）

日付変更線で “午前様”を告げる。

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

三年ほど姿を消していました。その間、なくて不便だったという人はいるでしょうか。地下鉄のあるうちに帰る人が増えた昨今ですが、地上を通ることであれば必ず目をやる時計です。範囲の定かではない歓楽街・薄野。左党なら、この広い通りが微

妙な境界になっていることは、数え切れないくらい経験しています。酔眼で見上げる度に、午前様がここで判明するという次第。したがってこのラインの別名は日付変更線。いつもながら時計が笑っているように感じるのは酔いのせいです。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工



質問箱

本づくりの「Q」にお答えします。
お気軽に質問をお寄せください。

Q ささやかな自分史をまとめようと思っておりますが、本としてある程度の体裁が整っていることも大事な点かかと考えています。どれくらいのページ数があればよいのか、そのために必要な原稿の枚数はどのくらいなのか教えてください。

原稿100枚、書けますか

A 自分の歩んできた道をまとめて人に伝えたいという願望はどなたもお持ちです。とくに戦争を経験し、高度成長、バブルと戦後日本の歩みと重なる人生には、書き残しておきたいことはたくさんあることでしょう。

どのくらいのページかいるか一概にはいえませんが、仮に400字詰原稿用紙100枚書くのは、その方面の仕事をしている人にも結構な作業なのです。

概ね1ページに400字1枚半として、単純計算では100枚で約70ページ。ほかに目次や扉、章や節の見出し、写真、挿絵なども要りますから、トータルで100ページくらいの本になります。

お手元にこの程度の厚さの本がありましたら、どんな印象でしょうか。同じページ数で重厚感を出すには、紙を厚くしたり製本に工夫したりという方法があります。最後は予算と時間を考慮してということになります。

ですから印刷会社と交渉するときは、まず予算と作りたい本の見本を提示するのがよいでしょう。

居間で本づくりセミナーを

自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ

企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきまます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています

慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたくと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。